

記憶から記録へ、
そして
記録から記憶へと
～過去の巨大地震を伝える～

愛媛県立伊予高等学校 2年 武智 優

1 動機と調査・発表の計画・目的

2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震など、近年は規模の大きい地震が生活に大きな損害を与えています。そして、30年以内に南海トラフ地震が起こるともいわれています。身近になりつつある地震ですが、近年の巨大地震の教訓を生かし、学校を避難場所に設定したり、津波到達の注意を促す看板を設置したりするなど、防災対策をすることが当たり前になりました。

しかし私はそのようなハードな防災対策に加え、もう一つソフトな対策をするべきであると考えています。具体的には過去の地震について学ぶことです。30年ほど前の事ならば、記憶に残っていると思いますが、50年、70年前ともなれば、覚えていない、もしくは生まれていないという人が多いと思います。過去の出来事というものは、時代の経過によって忘れられてしまう傾向にあります。しかし、温故知新という言葉があるように、過去から学ぶことは数えきれないほどあり、私たちへの影響は大きなものです。

予想される南海トラフ地震に対して、私が調査・発表を行ったのは、1946年に発生した昭和南海地震についてです。この地震は当時の新聞によると、私が在籍している伊予高校がある松前町や伊予市での被害が県内でも特に大きかったとされています。過去に起きた身近な地震について調査をし、当時はどうの被害があったかを知ることは防災意識を高めることにつながります。また、私の同級生には地震について無関心な人が少なからずいます。そのような同世代の人に対してはもちろんのこと、私は、この調査を通して、過去の地震について、より多くの人に伝えたいと思いました。

調査・発表をするにあたって、以下のような計画を立てました。

- (1) 当時の新聞の読み取り
- (2) 地震を体験された方へのインタビュー
- (3) 当時の松前港堤防のかさ上げ工事の調査
- (4) 当時の水道被害についての調査
- (5) 調査を通してのまとめ
- (6) 伊予高校、伊予市公民館での発表

この調査の目的は、実際に地震を体験された方にお話を伺い、より詳しく地震について知り、その体験を未来に受け継ぐことで、現代の課題である地震について無関心な人を少なくすることです。より多くの人に防災意識を高めてほしいという思いです。

2 計画の実行

- (1) 当時の新聞の読み取り

初めに、昭和南海地震について当時の愛媛新聞に書かれてあったことを挙げると以下ようになります。

- ・昭和21年（1946）12月21日の明け方4時19分に発生
- ・マグニチュード8.0（2016年発生 of 熊本地震はM7.3）
- ・死者6名、負傷者・軽傷者2名（松前町・郡中）



▲当時の愛媛新聞
(昭和21年12月21日付け)

愛媛県での死者が計 26 名であるため、松前・郡中での被害が大きかったことが分かります。また、全壊した家は 29 戸。瓦が道路に落ち、通行困難になったそうです。

最も気になったのは、松前町と松山市の境である岡田地区の出合橋のふもとで道路に多くの亀裂が生じたことです。この出合橋は松山から伊予高校に自転車で登校している生徒の通学路でもあります。昭和南海地震で亀裂が生じたとなると、現在、この出合橋が十分な耐震工事がされていない場合、これからさらに大きな地震が起きた際に道路の亀裂ばかりでなく、橋も崩れてしまう危険性があると考えています。

当時の新聞を読み取り、松前・郡中の被害が大きかったことが分かりました。また、私の家の近くには倒壊の危険性が高い建物があるため、対策の必要を感じました。

(2) 地震を体験された方へのインタビュー

次に、昭和南海地震を実際に体験された 3 名の方に、当時の地震についてインタビューを行いました。

1 人目は、松前町岡田地区で地震を体験された平井屯（たむろ）さん（1937 年生まれ）です。平井さんは昭和南海地震について、以下のようにおっしゃっていました。

- ・寝室の天井につるした投網のおもりが落ちる音で地震に気づく。
- ・親がこたつを家から川べりへ持って避難する。

→防寒対策のため（12 月の発生）

→火事対策（当時は炭を使っていた）

平井さんは、当時 9 歳だったこともあり、本当に怖かったらしく、詳しく教えてくださいました。話では、火事対策について気になりました。1995 年に発生した阪神淡路大震災での全焼が 7036 棟もあるように、地震の二次災害として火事の被害は大きいものです。耐震の家や津波への対策はよく耳にしますが、私たち愛媛県民の生活において、火事対策というものをあまり聞きません。また地震発生時に正しい判断をしなくては、被害は、大きくなります。これからは、火事への対策と準備も地域に呼び掛ける必要があると思います。



▲高潮対策の堤防を調査する

（平成 28 年 8 月 10 日）

次は、松前町で地震を体験された満田泰三さん（1926 年生まれ）に伺いました。

- ・場所や地域での被害の差を感じた。
- ・松前の海岸通りの家の瓦は軒並み落下した。

以上のようなお話を伺い、一度の地震で多くの被害があったことを感じました。

最後は、乗松多鶴子さん（1930 年生まれ）に伺いました。岡田地区で地震を体験された乗松さんは以下のようにおっしゃっていました。

- ・家のきしむ音、母の呼びかけによって危険を察知した。
- ・戸の開閉に戸惑う。

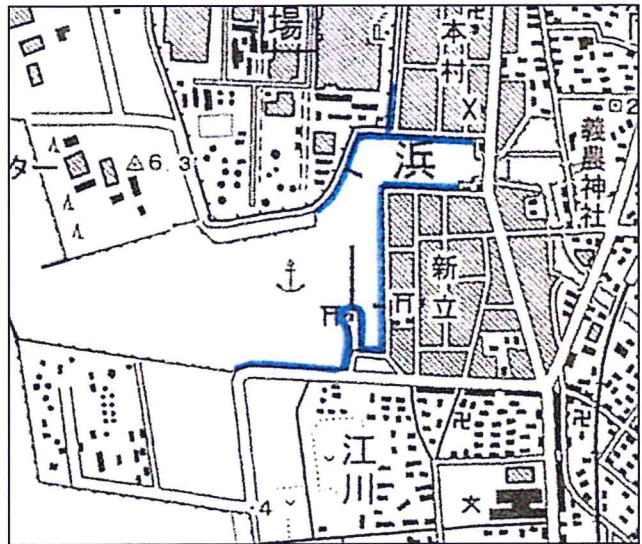
乗松さんは、東西向きの押し入れの戸はすぐに開いたが、南北向きの玄関の戸は中々開かなかったと話され、これは地震の揺れの方向が関係していると考えられます。戸の方向から昭和南海地震は東西の揺れ

だということが分かりました。

(3) 当時の松前港堤防のかさ上げ工事についての調査

満田さんと乗松さんの話から、昭和南海地震後、松前港を囲むように堤防が造られたことが分かりました。地震によって地盤が沈下し、沿岸の陸地全体が低くなりました。潮位が高い時、堤防を越えてしまう恐れがあったため堤防をかさ上げる工事が行われました。

過去の地震対策で造られた堤防は今もなお受け継がれ、地域住民の安全を守ってくれています。なので、未来のためにも地震対策を今からしておくことが重要だと思いました。



(4) 当時の水道被害の調査

インタビューから、地震によって使用していた水道にも被害があったことが分かりました。調査をすると、『松前町誌』502 ページには井戸水に海水が浸入し枯渇したとありました。また、『伊予市誌』259 ページには森上山・本郡浜岡地区で飲料水への被害の対策として簡易水道の建設がされ、地震後の被害も大きいということが分かりました。

▲松前港一帯のかさ上げ堤防 (9月24日調査)

(青の太線で書かれている部分が堤防部分)

(5) 調査を通してのまとめ

これらの調査をして、集めた情報や自分の思ったことを、冊子にまとめました。また、その冊子を校内や松前町・伊予市の中学校、図書館、役所に配布しました。当時の新聞、インタビューなどを通してより多くの人に過去の地震の被害について知ってもらい、防災意識を高めてほしいという目的に近づき、地震対策を促す活動ができたことを嬉しく思いました。

(6) 伊予高校での校内発表・伊予市公民館等での発表

2016年12月21日に伊予高校で発表会を開きました。校内での発表により、同級生を中心とする生徒や校内の先生方など50人ほどに向けての発表をすることが出来ました。同世代の人に知ってもらうことで、よりたくさんの人に、そして興味を持ってくれた人と共に、さらに内容が濃く、幅の広い防災意識を高めることができます。また10月4日には、私の地元である双海町で行われている双海史談会で約20人の方にお話をさせてもらいました。続いて12月23日に伊予市灘町の郡中地区公民館で、年配の方を中心とした50人にプレゼンテーションとお話をさせてもらいました。

この3回の発表会で一番の目的である「伝える」ことが出来ました。過去の地震について伝えることができ、問題の解決に少し近づけたと実感し、多くの人に伝えることに大きな意味があることを理解しました。

3 調査・発表しての感想・思い

調査・発表を通して一番に思ったのは、過去の地震の調査はこれから起こるであろう地震への備えにつながるばかりで、ハードな防災対策と並んでソフトな対策も欠かせないものだということです。70年前に起こった地震のため、資料が集めにくいという問題もありましたが、それだけに実際に体験された方に話を聞くことは価値があると感じました。新聞などの記事からは、正確な数や悲惨さを客観的に捉えることができます。しかし、どのように怖かったか、どのような判断をしたかなどは体験された方からしか聞くことができません。この価値ある話を未来に伝えていくことは、何よりも大切なことであり、そういう機会をたくさん設けるべきです。

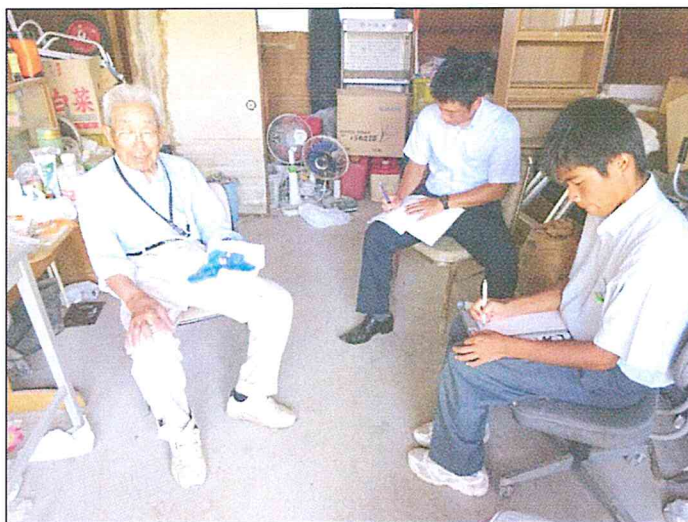
調査・発表しなければ知ることができなかったことが多く、私にとっても、そして、たくさんの人のためにもなったと感じています。

4 現代の課題とこれから

今回の調査・発表を通して、以下のような課題が考えられます。

- ・調査結果をより多くの人に伝える必要がある。
- ・過去の地震から学ぶ機会をもたなければならない。
- ・より多くの体験者から話を聞くことが大切である。
- ・他人ごとではないという認識を持つこと。

現代の地震に関する一番の課題は、無関心な人がいるということです。対岸の火事と感じ、私には関係ないという軽い考えが後になって後悔となります。



▲満田泰三さんへのインタビュー

また、私は小学校から高校に至るまで地震 (平成 28 年 8 月 10 日)

について総合的な学習の時間などを使い学んできました。しかし、身近な大人には地震について聞いてみてもわからない人がいますし、普通に生活していれば学習の機会はないと思います。これを改善するためにも、地域住民でソフトな対策に取り掛かる必要があり、シンポジウムや講演会への参加が当たり前になれば、防災の意識が高まって地震の被害を少なくできます。そしてその活動は、誰でも共に行うことができる活動であり、問題解決への大きな一歩となります。

私はこれから、この調査をより多くの人に伝える活動にしたいと思っています。それは、多くの人の記憶になってほしいからです。平井さんなど、実際に地震を体験された方の記憶を、私が冊子を作って記録にし、その記録が多くの人の記憶になれば、どんなに昔の地震であっても、私たちの中に残り続けます。また、今後行われるシンポジウムなどに私自身が積極的に参加し、呼びかけを行っていくつもりです。